

# 松浦鏡

世阿弥作

季は	地は	後	前
冬	肥前	ワキ シテ 前に同じ	ワキ シテ 里女
	松浦佐用姫		旅僧

「もろこし舟の名をとめし。く。松浦は何くなるらん。

詞 「是は行脚の僧にて候。我東国より都に上り。又西國修行と志し候ふ程に。筑紫に下り博多の浦に逗留仕りて候。肥前の国松浦瀉は聞えたる名所にて候へば。急ぎ尋ね行き一見せばやと存じ候。

道行 「箱崎や。明け行く空の旅衣。く。げに不知火の筑紫瀉。わだの原ゆく沖つ舟。汐路遙かの浦づた

ひ。松浦瀉にも着きにけり。く。

詞 「是は早松浦の浦にて候。委しくは知らねども。山

の粧ひ海の景色。世に勝れて面白く見所多く候。

折節雪降りて山河草木色めきたり。あれに釣人の見えて候。立ち寄り此処の有様尋ねばやと思ひ候。渚に拾ふ玉島の。川風さゆる袂かな。

サシ 「玉島の。此川上に家はあれど。さながら浦に住居

して。誰としもなき釣の糸。波より汐に引かれて。

身は浮舟の友千鳥。跡も渚に通ひ来て。海士乙女

等が麻衣。しほたれなるゝばかりなり。

「袖とふ風も折々の。便りなりけり松浦潟。

上歌  
「ながめよと。思はずしもや帰るらん。く。月

待つ波の海士小舟。心なき身にだにも。ながめは  
多きけしきにて。かゝる思ひの有るぞとも。知ら  
で慰む夕べかな。く。

ワキ詞  
「如何に釣人に尋ね申すべき事の候。是は遠国の沙  
門なるが。抖擗行脚に是まで來りたり。是は名に

きゝし松浦潟候ふよなふ。

シテ  
「さん候此浦は古へよりの名所なり。海山川に至る  
まで。名に流れたる名所にて候ふ御尋ね候へ。

ワキ  
「是なる流れをば何と申し候ふぞ。

シテ  
「是こそ松浦川にて候へ。此湊にては佐用姫も。鏡  
を抱きて身を投げゝるとかや。其魄靈残つて今も

鏡の宮とかや。参りて拝ませ給へとよ。

ワキ

「げにく 松浦の鏡の宮とは。佐用姫の靈魂なるべし。さてあの雪の積りたるは。松浦山候ふか。

シテ  
「あれは松浦山れいきん山と書きて。ひれふる山と  
読むなり。抑此山をひれふる山と申す事は。昔し  
狭手彦と言ひし人の。君の宣旨に従ひて。唐使の  
舟出せし時。佐用姫と聞えし遊女。舟の跡を慕ひ。  
あの山の上に登つて。沖行く舟を見送りつゝ。衣

の領巾を上げ袖をかざして招きしが。舟影遠くな  
るまゝに。招き呼ばゝりて臥しまろびしを。ひれ  
ふる山とは申すなり。然れば古人山上の憶良がよ  
みし詠歌にも。海原の沖ゆく舟を帰れとや。ひれ  
振らしけん松浦佐用姫。

地  
「げにや今見るも。ひれふる雪の松浦山。く。跡  
を知れとやよみ置きし。其歌人の名を聞くも。山  
の上の憶良なれば。ひれふるとよむ歌の。よみ人

知るも面白や。さぞな詠めせし。沖つ波間に行く  
舟の。絶々なりし古へも。今に知らるゝあはれか  
な。  
＼。

ワキ詞  
「嬉しくも謂ども承り候ふ物かな。とてもの御事な  
らば。佐用姫狭手彦の御謂れをも委しく御物語り  
候へ。

シテ  
「さらば語り参らせ候はん。

クリ  
「抑ふるき世語を。語るに付けて身の上に。麻生の

松原待つ事の。猶あり顔なる世の中なり。

サシ  
「昔し上代の事かとよ。狭手彦と言ひし遣唐使。

地  
「大君の勅に隨ひて。此松浦潟に下り。暫しの旅宿  
有りし時。国の采女の色に染む。花の香衣袖ふれ  
て。宿も一夜の仮枕。

シテ  
「あだし契と思へども。

地  
「幾夜の数とも知らざりけり。

クセ  
「其名を。佐用姫と聞くからに。小夜の寝覚の睦言

も。尽きぬ心の程見えて。山風吹き行く松浦潟。  
心づくしの秋なれや。木の間の月もほのかなる。  
朝顔朝寝髪。打ちとくる共寝なりけり。かくて  
契りも程経るや。時節も早く日頃経て。唐舟の纜  
を。解くや吉き日の門出とて。直に旅宿を出で給  
へば。

シテ「佐用姫いつしかきぬぐの。

地「恨みをそへて松浦潟。前の渚に立つ波の。声も惜

しまず鳴く田鶴の。蘆辺にさすらひ松が根の。磯  
枕草筵。しきりに臥し沈みつゝ。れいきん山にあ  
らねども。こゝもひれふる有様を。松浦姫といは  
れしも。佐用姫が異名なり。げに恥かしき世語り。  
「げにくれいきん山の謂れ委しく承り候ひぬ。さ  
て此鏡の謂れ何事にて候ひけるぞ。

シテ「此鏡は狭手彦の置きし形見なり。其後神とは現れ  
給へども。誠の鏡は御神体なり。如何に御僧。わ

らは、受衣の望み有り。其御袈裟を授け給へとよ。

ワキ

「始めより様ある人と見えつる上。受衣の望と承る  
は。やすき間の事なりとて。此袈裟を授け奉れば。

シテ  
「わらは、御袈裟を授かりつゝ。掌を合はせ座をな  
して。善哉解脱ふくむさうふく。てんえいぶによ  
かいらいきやうくわう。としょじゅしやう。

地  
「げに有難き法は得つ。此御布施は狭手彦の。形見  
の鏡を見せ申さん。暫く待たせ給へとよ。誠は我  
なりにける。／＼。  
(中入)

ワキ  
「始めより不思議なりつる天乙女。かの小夜姫の幽  
靈かや。いざや今宵は浦に伏して。教への如くも  
しほ又。彼神鏡を拝むやと。

歌  
「夜もすがら。月の真澄の水鏡。／＼。影を移すや  
松浦川。緑の空もさえ渡り。風も更けゆく旅寐か  
な。／＼。

「恋は山。涙は海となるものを。又いつの世を松浦  
渇。人知れず袖に涙の騒ぐかな。

一声 「唐舟も寄せやせん。

地 「西に山なき有明の。

シテ 「松浦の朝日鏡のおもて。

地 「向ふ光も心曇らば。我影ながら恥かしやな。

シテ 「行く年の惜しくもあるかな増鏡。見る影さへに暮  
れぬと思へば。

ワキ 「不思議やな此神鏡を拝すれば。向ふ面は移らずし  
て。さもなまめける男体の。冠正しき面色なり。  
こはそも如何なる御事ぞ。

シテ 「恥かしや其執心の報え巴こそ。契りも早く狭手彦  
の。恨みは猶も増鏡に。形を残して捨てやらぬ。  
恋慕の罪に沈めとや。

ワキ 「是は愚の御事かな。煩惱即菩提心。其一念をひる  
がへし。はやく仏果を得給ふべし。

シテ「承り候ふ去りながら。今宵一夜の懺悔を晴らし。

昔の有様見せ申さんと。

ワキ「いふかと見れば沖に出づる。唐舟に時移る。

シテ「声は波路に響き合ひて。

ワキ「松浦の川瀬。

シテ「和の汐合。

ワキ「千鳥。

シテ「鷗の。

ワキ「立つけしきに。

地「海山も震動して。く。心も暗れてひれ臥すや。

地によつて倒れ。地によつて立ち上り。跡を見れば。舟は煙波に遙なり。せんかた並木の。松浦山の上に。登りて声を上げ。

シテ「なふ其舟しばし。

地「其舟しばし留めよくと。白妙のひれを。上げては招き。かざしては招き。焦れ堪へかねてひれふ

る姿は。げにもひれふる山なるべし。

シテ

「世の中は。何に喻へん朝ぼらけ。漕ぎ行く舟の。

跡の白波そのまゝに。狂乱となつて。

地  
「狂乱となつて。れいきん山を下りて。磯辺にさす  
らひけるが。形見の鏡を身に添へ持ちて。塵を払  
ひ影を移して。見る程にくく。思へば恨めし形見  
こそ。今はあだなれ是なくはと。思ひ定めて海士  
の小舟に。こがれく出で。鏡をば胸に抱き。

身をば波間に捨舟の。上よりかつぱと身を投げて。  
千尋の底に沈むと見えしが。夜も白々と明くる松  
浦の。浦風や夢路を覚ますらん。浦風や夢を覚ま  
すらん。